

1-7 現代に伝わる製品と参考図 (B) — 束髪用髪飾り

束髪用の櫛(束髪櫛)や簪(束髪ピン)も主要な洋風装身具だが、本書では束髪用髪飾りとして、(A)とは別に紹介する。

束髪とは西洋式の髪のみまとめ方。髪をいくつかの部分に分けて立体的に結う日本髪に対して、髪を一くくりに束ねて頭頂部あたり(髷)でまとめる結い方。日本髪より軽便で衛生的であるため、着物姿の庶民も日常ではこの髪型を取り入れた。

束髪の始まりは明治期だが、『日本の宝飾文化史』7A-5)、本格化するの、欧米からの流行がファッションや髪型に積極的に取り入れられた大正初期頃からである。

束髪にも時代による変化がある。大正初めには明治後期からの束髪スタイルである詰め物(付け毛)で前髪を膨らませた「庇髪」(図1-7-1)が多かったが、大正三年頃からは詰め物を取り、前髪に分け目を入れた軽快な束髪も出てきた(図1-7-2)。



図 1-7-1
大正初期の庇髪
絵葉書より



図 1-7-2
軽快な束髪
大正3年5月『婦人世界』
より
髪の上から束髪櫛が少し
覗く。

櫛や簪を挿す位置に特に決まりはなかったが、簪は頭頂部の髪をまとめた髻の上に挿すことが多く、櫛は髻の下や前に挿した(図1-7-3)(図1-7-4)。なお、日本髪と違い櫛や簪は必須のものではなく、そのためこれらは挿されないこともあった。



図1-7-3
束髪飾り着用写真
大正4年3月『婦人世界』より
髻の中心に束髪簪、髻の下に束髪櫛の棟が見える。



図1-7-4
束髪飾り着用写真
大正4年11月『婦人画報』より
束髪にはいろいろあるが、これらの髪形は「渦巻型」とも呼ばれ、関西を中心に流行した(『近代日本の身装文化』⑥)。

束髪櫛

束髪櫛は、正面から見ると櫛の両サイドの歯(親歯)が細く、上面から見ると束髪に沿うように湾曲している。ここが日本髪用の櫛との大きな違いである。

歯の形には直線のものや波状のものがあるが、波状のものは昭和初期の特徴で大正期のものは歯が真つすぐについている。

高級品には、べっ甲に金銀や螺鈿らでん、蒔絵などで装飾したものが用いられ、大衆品にはセルロイドに蒔絵を施したものなどが用いられた。

図1-7-5は尚美堂カタログからの黒べっ甲(黒甲)の棟を金銀の草花で装飾した典型的な大正前期の束髪櫛。



図 1-7-7
べっ甲金銀螺鈿束髪櫛



図 1-7-6
べっ甲金銀螺鈿束髪櫛

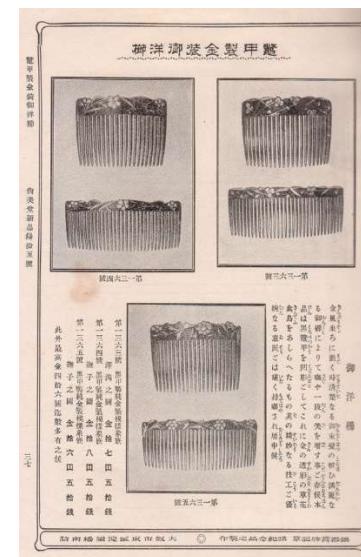


図 1-7-5
べっ甲束髪櫛 3 種

尚美堂

大正 2 年 1 月 『尚美堂新品録』

べっ甲製金装洋櫛とある。それぞれにやや縦長のタイプと、やや横長のタイプがある。

櫛の棟を金銀の草花や螺鈿、蒔絵で飾った黒甲（黒べっ甲）の束髪櫛。図 1-7-9 は白甲（白べっ甲）で棟に草花彫刻の束髪櫛。

図 1-7-6、図 1-7-7、図 1-7-8 は、前図とほぼ同様の形の、



図 1-7-10
セルロイド束髪櫛広告
ほうねん家
大正4年8月『演芸画報』
より
涼しげな夏向きで、小粒の
サンゴ、または模造眞珠入
りとある。

ド蒔絵の束髪櫛。
図 1-7-10 はセルロイドの束髪櫛広告、
図 1-7-11 はセルロイ



図 1-7-9
べっ甲棟彫刻束髪櫛
白甲は最高級品に用いられた。



図 1-7-8
べっ甲蒔絵螺鈿束髪櫛

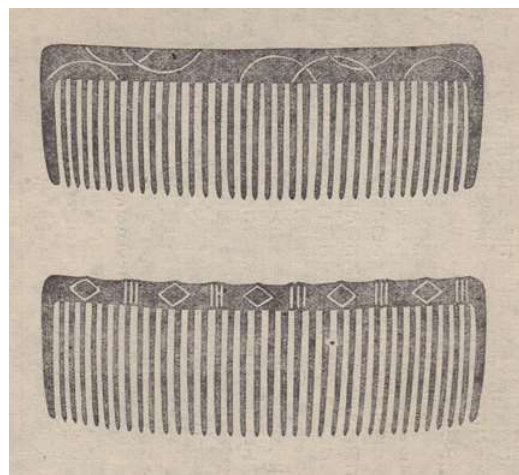


図 1-7-12
べっ甲銀線模様横長櫛広告
万久本店
大正 1 年 9 月 『演芸画報』 より
年増向き前櫛とある。

これらは標準型の束髪櫛だが、それ以外に大正二年には、「王冠形束髪櫛」という、当時では奇抜なデザインの前髪櫛も売り出された。これについては、すでに図 1-2-3 で広告を、図 1-2-4 で実物を紹介済み。

その他、棟幅の細い横長の束髪櫛も用いられた。

図 1-7-12 はその広告図。図 1-7-13、図 1-7-14 はほぼ同形のセルロイドとべっ甲の横長束髪櫛。



図 1-7-11
セルロイド蒔絵束髪櫛
セルロイドだが良品。上部に金蒔絵が施してあるので挿せばべっ甲とは見分けが付きにくい。



図 1-7-13
セルロイド螺鈿横長櫛

『櫛かんざし』（岡崎智予コレクション）⁶⁷ではこのような束髪櫛を「ハイカラ櫛」と称している。



図 1-7-14
べっ甲横長櫛

束髪簪（ピン）

束髪には束髪簪が用いられた。西洋式に「ピン」と呼ぶこともあった。束髪簪の最大の特徴は一般的な日本髪用の簪には必ずといていいほど付いている「耳搔き」がないことである。また、金銀簪の場合、飾り部と足の部分が蝶番ちようつがいで連結されていて飾り部が束髪に添うように作られているものが多く、また髪から落ちないように、足の中間で内側向きにU字やV字の曲がりがあるものが多い。

蝶番方式の束髪簪は「花月挿しかげつ」とも呼ばれた。由来ははっきりしないが、明治三十五年頃に新橋花月楼の女将が「花月巻」という束髪を結ったという記録がある（『近代日本の身装文化』）。その髪型に最初に用いられたのでこの名称があるようだ。



図 1-7-17
 純銀金着菊透し束髪簪
 広告
 実業之日本社代理部
 大正 4 年 10 月『婦人世界』より
 御大典記念として売り出されたもの。

図 1-7-17 は純銀に金着きんぎせ（金張りのこと）の菊透し束髪簪の広告。
 図 1-7-18、図 1-7-19 はほぼ同形の銀の大型束髪簪。



図 1-7-16
 白甲玉繫ぎ束髪簪

図 1-7-16 の白甲の玉を 3 つ繫いだ束髪簪は、紹介済みの王冠形束髪櫛（図 1-2-3）によく見られる上部の玉飾りに似ている。そこからこれは大正二〜三年頃か、その少し後の束髪簪と推察できる。



図 1-7-15
 日本髪に束髪簪をつけた女性
 絵葉書より

束髪簪は、束髪にのみ用いられたかという点、そうでもなく、日本髪にも用いられ、和洋兼用の簪として発達した（図 1-7-15）。



図 1-7-20
真珠入りべっ甲束髪簪
尚美堂
大正 5 年 9 月『尚美堂時
報』より
「流行の元ピン」として
紹介されている。

図 1-7-20 は商品カタログからで、大正五年に売り出されたシン
プルなべっ甲製の束髪簪。図 1-7-21、図 1-7-22 はそのアレンジジ
ンで、上部角を丸めたべっ甲束髪簪。



図 1-7-19
銀透し大型甲髪簪
孔雀図



図 1-7-18
大型銀透し簪
草花図



図 1-7-24
ヒスイ彫刻束髪簪



図 1-7-23
ヒスイ彫刻束髪簪
尚美堂
大正 6 年 3 月『尚美堂時
報』より

はその実物。図 1-7-23 はこの頃流行したヒスイ彫刻の束髪簪。図 1-7-24



図 1-7-22
上部金被せべっ甲束髪簪



図 1-7-21
小粒真珠入り棟彫刻束髪簪



図 1-7-26
18 金製留針セット
専用ケース入り
尚美堂
大正 2 年 1 月『尚美堂新品
録』より

留針
束髪には束髪用留針が用いられた。頭頂部の髻のところや周辺を整えたり、部分的に固定するための装飾的結髪具である。
図 1-7-26 は 18 金の留針セット。その他、べっ甲製、擬甲製、セルロイド製の安価なものが多く用いられた。

なお、すでに図 1-2-10 で紹介した金製合成ルビー（真珠入り）の束髪簪も大正前期の束髪簪である。金銀簪でもこのように蝶番方式でなく、飾り部と足の一体形の束髪簪もあった。また、図 1-2-28 では、大正二年に発売されたセセッション様式の束髪簪の広告も紹介した。



図 1-7-25
K18、プラチナ交り真珠入り
束髪簪
尚美堂
大正 6 年 4 月『尚美堂時報』より

この時代には昭和初期頃のものとも見えるような貴金属束髪簪もすでに売り出されていた。
図 1-7-25 は飾り部が横長の動きのあるデザインの 18 金束髪簪。



図 1-7-28
たぼ留（つと留）とその着用図
尚美堂
大正 5 年 9 月『尚美堂時報』より
真珠やエメラルドで飾った K18、K20
の「たぼ留」。



図 1-7-27
セルロイド製留針

たぼ留（つと留）

ほとんど知られていない髪飾りだが、束髪には髪の後ろの張り出したところ（髻）^{たぼ}に、たぼ留というクリップ式の装身具をつけることがあった（図 1-7-28）。

たぼ留は関西方面では「つと留」と呼ばれた（関西では「たぼ」のことを「つと」と言うため）。貴婦人方が髪の後ろ姿のおしゃれとして、たぼを引き締めて襟足の美しさを強調するために用いられた。図 1-7-29 は着用部分の拡大図。



図 1-7-29

たぼ留（つと留）着用部分拡大図